

『#セブン・シスターズ (What Happened to Monday)』(2017年: トミー・ウィルコラ監督) を amazon prime で視聴した。監督は、ノルウェー出身の映画監督・脚本家。

近未来、地球は異常気象と人口過剰によって資源が減少し、戦争や難民問題で主要国はみな滅び去り、欧州連邦が新たな超大国として君臨していた。

さらに、遺伝子組み換え作物の影響による多生児の増加により、保全生物学のKが提唱する理論に基づいた強制的な人口抑制が行われるようになっていた。

それは、2人目以降の子供が生まれた場合、『児童分配局』によって親から引き離され、枯渇した地球の資源が回復する日まで「冷凍保存」されるという一人っ子政策だった。

そんな中、S家で「七つ子の姉妹」が誕生した。「月曜日」から「日曜日」まで各曜日の名前を付けられた彼女たちは、それぞれが週1日だけ外出し、7人で1人の人格KSを演じることで『児童分配局』を欺こうとする。外出日の姉妹は「1日の行動」を記録して、1日の終わりの『報告会』で他の姉妹たちに教えていた。社会に出た姉妹たちは、それぞれの得意分野を活かして、キャリアウーマンとして成功していた。週1日しか外出できず、まともな恋愛もできない姉妹たちは不満を抱え続けながらも、30年間にわたって『児童分配局』の監視から逃れ続けていた(一人の女優が7つ子の姉妹を1人7役で演じている)。

2073年のある日、30歳になっていた彼女たち7姉妹の長女「月曜日」が外出したまま、夜になっても帰宅しないという事態が発生する。これにより、7姉妹の日常が狂い始めていく。その後、残された姉妹の「月曜日」探しが始まる。まさにタイトル通り、What Happened to Monday?である。実は、自分たちが「7つ子」であること全てが当局にバレていたのだ。終に、深夜、姉妹たちの自宅に、『児童分配局』の強襲部隊が突入してくる。それに彼らは自分の能力を活かして応戦するのだが…。

最後、生き残った姉妹は『児童分配局』に乗り込み、「月曜日」の秘密を知る。そして、『児童分配局』を支配する保全生物学のKの欺瞞を知る。さて、結末は如何に。

What Happened to Monday?という謎を迫りかけ、その過程での格闘・戦闘シーン、そして結末を知るまで、目が離せない120分であった。

本作の中核にある「児童分配法」は、事実上の一人っ子政策であり、複数の子どもを持つことが違法とされ、余剰児童は冷凍保存されるという設定である。この

ことは、1979年から2015年まで中国で実施された実際の一人っ子政策を強く想起させる。

映画では、食糧不足と多胎児の急増が政策の導入理由となっている。中国でも人口抑制は経済発展と資源管理のために導入された。映画では個人情報チップで管理され、同一人物の複数存在が即座に検知される。中国でも都市部では厳格な戸籍制度と罰則が存在した。映画では「冷凍保存」とされていた子どもが実際には処分されていたことが明かされる。中国でも強制中絶や女性の出生忌避など倫理的問題が指摘されてきた。7姉妹が一人の人格を演じるという設定は、個人のアイデンティティが国家政策によって抑圧される象徴であろう。中国でも家族の選択が国家の枠組みに制限されていた。

人口管理をするディストピア映画

『赤ちゃんよ永遠に (Z.P.G.)』(1972年)

『未来惑星ザルドス』(1974年)

『ガタカ』(1997年)

『トゥモロー・ワールド』(2006年)

『わたしを離さないで』(2010年)

『TIME/タイム』(2011年)

『エリジウム』(2013年)

これらの映画が問いかけるものは、「誰が生きるべきか」を決める権力の危うさ、人間性は制度の中でどこまで守られるか、技術や政策が倫理を凌駕してしまう、である。